

シニア・健康

わが街で暮らす

諏訪市地域医療・介護連携推進センター ライフドアすわの取り組み

19

令和元年7月、臨床倫理を研究している眞岡真子先生(神奈川県相模原市箕岡医院院長)をお招きし、ライフドアすわ開所2周年記念講演会を開催しました。自分の最期を自分の意思で決めるアドバンスケアプランニングについての話でしたが、100名を超える参加者が熱心に耳傾けてくれました。ライフドアすわを立ち上げてから2年余が経過し、どんな変化が表れてきたのでしょうか。



かさい ひでき
河西 秀樹

「づくり」があります。誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせるために地域全体で支え合う地域包括ケアシステム。その構築には、医療・介護はもとより暮らしに関わるあらゆる機関や住民を含めた「顔の見える関係」が必要不可欠です。その多くの職種を結びつ

諏訪市地域医療・介護連携推進センター事務部長



ライフドアすわ開所2周年記念講演会の様子



多職種協働セミナーのグループ討議の様子

けることがライフドアすわの大きな使命の一つなのです。ですから、ライフドアすわが主催する事業(多職種協働セミナー・地域支え合い協働セミナー・地域ケア会議・各

種イベント)においては、色々な職種や関係機関などに声を掛け参加をお願いしています。こうした、努力が徐々に浸透し地域包括ケアシステムを支える多職種が集まり始めました。医師、歯科医師、看護師、病院、社会福祉協議会、介護関連施設・事業所、介護

士、理学療法士、ケアマネージャー、薬剤師、民生児童委員、金融機関、警察、新聞販売店、郵便局、栄養士、宅食事業所などです。多職種協働セミナーでは、集まった多職種がグループに分かれ、決められたテーマについて情報や意見の交換、そ

して解決策の模索をしています。そうした中で、お互いの所属先や顔や名前を覚え、「顔の見える関係」をつくっていきます。そして、その「顔の見える関係」が地域の住民が抱える諸問題の解決につながっていきます。

7月13日には、すわつチャオで認知症のVR(バーチャルリアリティ)体験のイベントを開催しましたが、その中で各種相談コーナーを設けるにあたって、色々な機関に声を掛けたところ快く協力をいただいたのも、2年を経過して、「顔の見える関係」が徐々に広がっていることを実感できる一場面でした。また、本紙のわが街で暮らすの連載にも、地域包括ケアを支える人々と題して、多職種の方に登場していただいています。これも「顔の見える関係」が着実に広がっている証です。

ライフドアすわの四つの大きな役割①在宅医療・介護連携推進事業、②生活支援体制整備事業、③認知症総合支援事業、④地域ケア会議推進事業」はすでに説明しましたが、この四つの役割に共通する目的に、「顔の見える関係

ライフドアすわ開所2周年を迎えて

「顔の見える関係」が少しずつ広がっている

(毎月第2日曜日掲載、題字は河西秀樹・ライフドアすわ事務部長)

①一人歩きの理由

認知症の薬とくらす
作:ライフドアすわ
絵:山岸久美子



認知症は、高齢になると誰にでも起り得る身近な病気で、他人事ではありません。認知症を身近に感じる、ほっこり漫画を今月から掲載します。漫画を描いてくださるのは、安曇野社会福祉協議会で活躍なさっている山岸久美子さんです。(ライフドアすわ)